サステナブルな地球と社会の実現には飛躍が必要
～沙漠と海と植物プランクトンが地球を救う～

2018年4月に、ハワイのマウナロア観測所において月平均のCO_2濃度がはじめて410ppmを超えた。18世紀半ばの産業革命以前には、世界の年平均CO_2濃度はおよそ280ppmだったとされている。太平洋の楽園において、このような数字が出たことはショッキングだ。

いま毎年2ppmずつCO_2は上昇しており、このままだと300年後には1,000ppmを超える。1,000ppmを超えると眠気を誘い、さらに増加すると、だるさや頭痛、めまい、吐き気を引き起こす。

ひ孫の時代に向けて、いまの私たちが、きれいな空気と自然を取り戻さなければならない。

最近、SDGsについて積極的な意見を聞くことが増えている。「儲け」のために「SDGsを利用する」という発言は構わないが、そこに「SDGsのゴールをめざす」という理念が見えないとき、私は危機感を覚えてしまう。企業にとって儲けることは大切で、その儲けがサステナブルな地球と社会の実現に直結するという考え方で、事業を考えてほしい。

たとえば、サステナブルな地球と社会の実現のためには、CO_2を削減しながら、経済的な持続性ももち、新産業や新事業も創出することで雇用にも貢献するという発想が求められる。

そうした条件を備える事例の1つとして、東京大学大学院の倉橋みどり特任准教授が進める「バイオマス・ショア構想」という研究がある。大規模な植物プランクトンの水田を海岸に近い沙漠に造成することで、短時間で実用化にこぎつけ、大規模であることでCO_2削減にも、そしてプラスの経済的収支も狙えるという構想だ。

こうしたサステナブルな環境と社会を実現できる研究や事業に対して、国や産業界をあげて支援し事業化するような仕組みができれば、加速度的に進むだろう。

経済社会と地球を守るには、これまでの延長線上にはない飛躍したアイデアや考え方が必要なのではないだろうか。

［編集室 文斌（ブンヒン）］